

服をめぐる

衣服の研究現場より ― 京都服飾文化研究財団(KCI) 広報誌



小説

『森のドレス』

いしいしんじ

服をめぐる 04

一人一品

いしいしんじ（小説家）

『森のドレス』 p3

地産街道をゆく④

福井市 p10

今日の補修室 第四回

ドレスの着せ付け方法 p14

KCI Wunderkammer

猿毛製コート p15

PEOPLE

映画で見た

あこがれのファッションは何ですか？ p16

一人一品

小説家 × KCI 収蔵品

ゲスト

いしいしんじ

Shinji Ishii



本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体への夢」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。Website <http://www.kci.or.jp/>



「FUTURE BEAUTY」展 ハウス・デア・クンスト (ミュンヘン、2011年) Photo: Dirk Eisel

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。今回のゲストは作家のいしいしんじさんです。

いしいさんは1966年、大阪生まれ。京都大学を卒業後、会社員時代に書いた日記が評判を呼び、1994年作家デビュー。幻想的かつ寓話的な小説で注目を浴び、『麦ふみクーツェ』で第18回坪田譲治文学賞、『ある一日』で第29回織田作之助賞大賞、『悪声』で第4回河合隼雄物語賞など、さまざまな文学賞を受賞されています。現在は京都市在住。レコード収集家として、愛用の蓄音機「コロちゃん」を使つてのレコード鑑賞会を積極的に関催するなど、文芸活動にとどまらない多岐にわたる活躍をされています。

そんないしいさんが選んだKCIの収蔵品は、数千匹もの玉虫の翅で模様を描き出した19世紀半ばのドレス。玉虫の翅は光によってきらきらと輝き、見る角度によってさまざまな色に光ります。この七色に輝くドレスから、いしいさんはどのようなお話を生み出したのでしょうか。

「小説」

森のドレス

いしいしんじ

夜明け前、少年は祖母の声に、裏の蜜小屋まで呼ばれた。ろうそくの炎のまわりで黄金色の光が充滿している。ひとの姿はなく、ただ祖母の声だけが、小屋の天井あたりでゆったりと旋回している。

「わかるね。父さんがいなくなつたいま、たまむしをあつめるのは、いよいよ、おまえしきない」祖母の声はいった。

「ほんの五千ぼつち、だなんて、あまくみるんじゃない。たまむしは、あつめにきたひとのこころを読むんだ。いいかい、たいせつに、たいせつに、あつかうことだよ」

少年はこくんとうなづく。大きな瓶に歩みよると、ひしゃくを使い、右、つぎに左と、肘から先の前腕に、村に長く伝わる焦げ茶色の蜜を、たっぷりそそぎかけてゆく。姉がいつもそうしていたように、記憶のなかから浮上する、あいまいな笑みを口元にたたえて。もう十四歳。父が先週の土曜、軍服姿で町へ出ていった意味は知っている。

日が昇るまで蜜小屋でうずくまっている。朝日が小屋の床に、窓のかたちの日だまりを落としたら出発だ。たまむしは、光を食べるいきものだ。日が高くなつてはじめて、木陰から飛びたつのだ。

腰に袋をさげ、森の茂みを割って歩く。空の高みで、祖母の声がついてきているだろうが、気にはならない。姉、父のあとについて、幾度となくかよった森の道。八つ年上の姉は、村はじまって以来のむしとと呼ばれた。ひとさし指にほんのわずかな蜜をつけただけで、何千何万のたまむしが



いしいしんじさんが選んだ一品

イヴニング・ドレス 1850年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 畠山崇撮影

緑や紫に輝く玉虫の前羽が留め付けられた綿製の軽やかなドレス。イギリスの若い姉妹が着用したと伝わるこれらのドレスには、一匹から二枚の羽を採取したとすると約5千匹もの玉虫が使用されていることになる。生地と刺繍はインド製。当時、インドを植民地化していたイギリスは玉虫刺繍のさまざまな製品をインドから西洋市場に向けて輸出していた。本品のような玉虫付きドレスやショール、帽子などのファッションが西洋各国で流行した。



流れる煙のようにおしよせた。

「たまむしたちも、おねえちゃんが好きなんだ」まだ四歳、五歳だった少年の目からみても、姉の面立ちは雪嶺の上の空のように澄みわたり、いつまでも、いつまでも、時間をこえて見つめていたくなる。粗末な麻の着衣に何万のたまむしが貼りつき、空じゅうに敷き詰めた虹みたいに、ゆっくりと流れていく。

「わかる？ わたし、山を着てる」

胸元の麻布を引っ張りながら姉が笑う。そうして、はいまわる玉虫を指さすと、

「その上に、森を着てるの！」

その場所につく。ひとがこの大陸に顔をみせるより、はるか前から緑陰をおとしてきたエノキの群生。しずかに腕をあげると、黒々と乾いていた蜜が陽光をうけ、やわらかく飴色にとろけだす。祖母の声はとうも前に村へ帰ってしまった。

樹冠の上で、きらきらと、小粒の虹がおどっている。陽光を食むむしたちのうち、おいに敏感な一頭が、地面近くからたちのぼる蜜に気づき、まっすぐにおりてくる、そのはずだった。つづいて二頭、三頭、四頭、たちまち上腕は、重たいくらい、虹のきらめきに覆われ、ブラシでこそぎ落とせばたちまち数千のむしが収穫される、そのはずだった。

一頭すら、少年の腕に舞い降りてこない。たったいままで飛びかっていた虹の群れが、たつぷりな陽をうけ、縦横に枝をのばす、エノキの樹冠からかき消えている。

そのかわり。

ざし、ざし。草を踏む音。エノキの幹のむこうから、虹が歩いてやってくる。少年は呆然と、しかし、待ち望んでいたようなきもちで見つめている。ちがう、いまも森にいる。七歳の冬に発した叫びが、喉の奥でこだまする。おねえちゃんが、密猟者にやられたりするもんか！ 雪が積もっていた。黒いしみが転々と落ちていた。灰色の、白黒の記憶。

そのなかから虹は、起き上がり、迷いなく、少年めざしまっすぐにやってくる。何万、何億のたまむしが凝集し、ひとのかたちをなしている。すらっと背の高い、十代後半の、若い娘。

虹の娘が目の前に立つ。少年は、かけようとした声をゆっくりとのみこむ。たまむしにはひとのころがわかるのだ。娘は右手をのばし、少年の頬をさわる。つやつやと滑る木の葉の感触。むしじやない、少年はおもう、おねえちゃんは、むしになったんじゃない、森になったんだ！

ころろを読んだのか、虹の娘が、声もなくしずかに笑うのがわかる。全身の虹がさわさわと揺れ、それと同時にエノキの木々が、森が、山を覆う空、大地が揺れ動く。

娘のかたちをなすたまむしの甲は、ただきらびやかに輝いているだけではない。とりどりの色、景色、時間を織り交ぜて光る。はじめて手をつないででかけた森のみずうみ。母と祖母が顔を寄せ合う大鍋の湯気。胸をそらせて大笑いする父の、こんがらがった髭。うまれたての妹の瞳。動かなくなつたおじいちゃんの、深い洞窟みたいな目玉。たまむしはひとのころを読むだけでなく、まるで鏡のように、ひとのころを写すのか。

「またきてね」

娘は、よく通る声でいう。

「あなたのためにあつめたの」

その瞬間、娘は消える。芯を失ったたまむしの甲が、ざつ、と虹の滝のように、森の緑陰に落ちかかる。少年はじつとみつめている。最後の二枚、三枚が、ゆらり、ゆうらりと、木陰にたまった光の上に落下する。堆積した光の記憶。少年は森の奥をみやり、目をこすって、わずかにうなずく。そうしてしゃがみこみ、腰の袋をはずして、地面に積もった五千枚の虹を、ひとつひとつ、「たいせつに」拾いあつめてゆく。



〔右頁〕

『ガゼット・デュ・ボン・トン』誌より

「ちいさな港」1924年

〔左頁〕

〔左〕キセル 1960～70年代

〔右上〕魚型のブローチ 1971年頃

〔右下〕珊瑚のイヤリング 1930～40年代

すべて京都服飾文化研究財団所蔵

成田舞撮影



福井市



緻密な文様のポビンレース(18世紀)。
素材は麻が主流だった。

KCIが所蔵する18世紀のレース。
ドレスの襟や袖口を飾った。

今夏、女性のファッションで目を引くもののひとつが多様なレースだ。白く繊細な花文様は少女のような愛らしさを、肌を透かす黒い網目は大人の色気を思わせる。純真から妖艶まで、レースのもつイメージは女性の多面性を見ているかのようだ。現在、女性のアイテムの筆頭であるレースは、かつての西洋ではとりわけ男性に好まれた時代があった。17世紀の肖像画を見てみよう。裕福で勇ましい甲冑姿の男性の首元には、純白のレースでできた襟が誇らしげに輝いている。現代の私たちから見ればいささか意外な取り合わせに思えるが、当時のレースは華美な装飾を好む「男らしさ」の象徴でもあったのだ。レースは今も昔も、老若男女を魅了してやまない。

16世紀半ば、イタリアやフランドル地方で興った現在のレースの原型は、たちまち欧州各地に広がり、産地特有の文様を形成していった。当時のレースの代表的な技法は、縫い針と糸で作られるニードルポイントレースと組み紐の技術を用いたポビンレースの二種類に大別される。いずれも麻の製糸技術や漂白技術に優れていたフランドル地方やフランス北部を中心に発展し、手工レースはますますその繊細さが競われるようになっていく。17世紀末にはフランスが欧州の市場を支配し、18世紀にかけて贅を凝らした見事なレースを数多く生み出した。そ

の価値は時に宝石をも凌いだという。

莫大な時間と手間を要する緻密なレースの生産は、19世紀になると他の繊維産業と同じく人の手から機械へと移行していく。手業の集積をいかに機械で実現するか、そこに欧州各地で心血が注がれた。レース熱は止むことなく、なおも広がり続けた。

時代が下り、20世紀初頭。日本では洋装の普及とともにさまざまな洋装品の生産が各地で興り活況を呈し始めた。レースはとりわけ戦後に生産が拡大していく。

なかでも福井市は織物の産地として広く知られた街だ。明治時代には絹織物の羽二重、大正時代はレーヨン織物、そして近年では合成繊維の開発が進み、世界有数の合成繊維織物の産地となった。

この織物の街に国内外のファッションデザイナーからの注文が絶えないレース工場があると聞き、訪ねることにした。現代のデザイナーを惹きつけるレースとは一体どのようなものなのだろう。

福井市の中心地から南へ約4km、足羽川の堤防を下ったところにその「双葉レース株式会社」がある。大正12年に創業した同社は当初、布帛を製造していたが、昭和30年代後半にレース編み機を導入し、以降、生産体制をラッセルレースという機械レース中心に据えている。社長の川下晴久さんが出迎えてくれた。「今のレースは8割



チェーン状に繋がれた銅のパーツ。



100種類ものパーツを組み合わせる。



双葉レース株式会社取締役社長、川下晴久さん。



柔らかく繊細なレースは双葉レースの特徴。



工場では様々な注文に応じたレースが編まれている。天然繊維のレースの製作は埃とりなど頻繁に機械のメンテナンスをしなければならない。

以上が海外からの輸入です。」最盛期には100数社ものレース工場が福井や石川地方にあったという。今はその大半が廃業か海外へ移ってしまったそうだ。「私たちがここで作っているレースの糸の多くは、天然繊維なんです。」現在、世の中に流通するレースのほとんどは合成繊維で作られている。レースのような複雑な編み柄は強度があって引っかかりの少ない合成繊維が大量生産には適している。しかし双葉レースはその逆をいく。「国内外のレースメーカーさんの大半は、合成繊維でカーテンや下着を作っていますが、うちはアウターウェア用のものを天然繊維で手間と時間をかけて作っています。こんなに非効率なものは他では作りませんよ。」

その機械を見に、工場のなかを案内してもらった。16台の編み機がガシャガシャと大きな音をたてている。「これは昭和40年代の機械です。天然繊維のレースはこういう機械でしか編めません。」新しい機械は高速に編むため、合成繊維の細糸を対象としているが、この機械は糸の太さや風合いに合わせて微妙に調整することができるといふ。特に天然繊維は毛羽立ち、絡みややすい性質があり、時々調整をしながら稼働する必要があるのだ。約900本のウールや綿の糸で編みあがっていく出来立てのレースは、ふんわりと柔らかそうで温かみがある。合成繊維のキラリと張りのあるレースのイメージとは少し違う印象だ。

工場の一角に油で光る小さな鋼で溢れた部屋があった。「レースの柄はこれら100種類近くあるパーツを用いて作

ります。」高さや幅が微妙に違うパーツの組み合わせが機械のなかで糸を送り出すコントロールとなる。柄はこの組み合わせ次第で無限にできるといふ。きめ細やかなレースのデザインがこの一ピース一ピースから出来上がったいていると思うと、硬く無機質な鋼がとても愛おしく思えてくる。

「こんなレースが欲しい、というデザイナーの要望に応えていきたいと思っています。」今シーズンではある有名米国人デザイナーが綿100%のレースを発注していたという。「コンピュータでは出来ないものを作りたい。」という川下さんに、今、多くのデザイナーが信頼を寄せている。

かつてレースは産地を代弁していた。それは文様であり、人々の創意や気質だった。そして生み出されたレースの魅力はその細かさだけでなく、麻や絹特有の有機的な美しさにあったのではないか。だとすれば、双葉レースはその本質を今も引き継いでいることになる。数百年の時間と国の隔たりを超え、レースの糸はどこかで繋がっているのかもしれない。

取材文・筒井直子 写真・福嶋英城

取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）

双葉レース株式会社

〒918-8112 福井市下馬1-902-3 電話0776-360363

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫
——そこはまさに「驚異の部屋」。

KCI Wunderkammer

猿毛製コート

素材：猿毛 推定：オナガザル科アビシニアコロボス
(学名：コロボスグレザ)
原産地：アフリカ 製作年：1930年代

長く垂れ下がった黒い毛。しっとりして
いて艶感がある。まるで人間の黒髪のような
この毛は西洋で1920年代にドレスの装飾
に頻繁に用いられ、30年代になるとコート
の素材として流行した。当時、ミンクやチ
ンチラなど従来の毛皮素材に加え、より毛
足の長い毛が好まれるようになった。本品
はオナガザル科のアビシニアコロボスの毛
と考えられる。アフリカ大陸の熱帯雨林に
広く分布し、体長は約45〜70cm、尾の毛
は長いもので90cm程度になる。(筒井)



コート 1930年代 アメリカ
金井純氏寄贈 京都服飾
文化研究財団所蔵

今日の補修室

TODAY'S
RESTORATION
ROOM

第四回

ドレスの着せ付け方法

KCI収蔵品の補修、
保存を行う「補修室」より
日々の奮闘を綴ります。

前回の「今日の補修室」はドレスの着せ付けに欠かせない「時代マネキン」をご紹介しました。
では、この時代マネキンを使ってどのようにドレスを着せ付けるのでしょうか。今回は18世紀
の宮廷衣装(ローブ・ア・ラ・フランセーズ)を例に、着せ付けの過程をご紹介します。



まずドレスを計測し、ウエストの
ジョイント部を調節して時代マ
ネキンの背丈や体の傾斜角度を
調節します。



ウエストのジョイント部や背中に
綿を詰めて、ドレスの土台を作り
ます。ドレスの大きさに応じてど
のくらい綿を入れるのか微調整
が必要です。



着装用コルセットを付けます。こ
の際、ドレスと同じウエストサイ
ズになるまでコルセットの背面
を絞っていきます。



着装用コルセットの上にすべり
止めのジャージーシャツを付け、
スカート部のシルエットを作る
ための「パニエ」(レプリカ)と呼
ばれる横張りの下着を付けます。



パニエの上に着装用アンダース
カートをはかせ、スカート部の膨
らませ具合を調整した後、ペティ
コート(スカート)を付けます。



ローブを着せます。

7 完成!

最後にストマッ
カー(胸当て)を
付けて、ローブ・
ア・ラ・フラン
セーズが完成。



解説：福嶋
着せ付け：梅野

菊田琢也

Takuya Kikuta



文化学園大学・女子美術大学他非常勤講師。専門は文化社会学／ファッション研究。共著に、『相対性
コム デ ギャルソン論』（フィルムアート、2012）など。

『大人は判ってくれない』（1959）のアントワヌ少年が、タイプライターを盗んだ罪で収監された留置所の中で、タートルネックを口元までたくし上げる。対話を拒絶するように、寂しさをごまかすように。こうした所作が見せる服の表情に惹かれることが多い。この映画を観たのは高校生の頃で、それはちょうど寒い冬の季節だった。その冬は、両親からももらったタートルネックのニットを学生服の下に着込んで登校していて、授業中によく真似をした。教室のこもった匂いが、くすぐったかったのだ。

朴鈴子

Young-Ja Park



山口情報芸術センター[YCAM]エドキュエーター。前職は京都国立近代美術館にて教育普及を担当。専門は博物館教育学。

ファッションというか、『高慢と偏見』や『タイタニック』で見た「コルセットの紐をぐいぐい縛られる姿」に憧れ、京都時代、KCIの皆さんに着せていただいたことがある。自分にあれだけウエストが細くなるポテンシャルがあったこと大変喜んだ。同時に、着る服で自己表現する人がいる一方で、着るものが人の振る舞いや態度を生み出す側面を感じた体験でもあった。ゴムパン＋Tシャツ＋スリッポンが基本アイテムの私も、まとうもの次第で『華麗なるギャツビー』のキャリー・マリガンのようにになれるかもしれない。

矢田 ヴァッターニ 明美子

Yumiko Yata Vattani



ライター／エディター。イタリア外交官の妻 & 国際派 with 日本魂子育て業務。ローマ在住。著書に『リトル・ブラック・ドレス』（二見書房）。

よく「オシャレすぎて号泣」する私ですが、映画で号泣レベルは『華麗なる賭け』（1968）のみ。フェイ・ダナウェイのラベンダー色の帽子とスーツ。紫でなくラベンダーですからね。ネイルは赤でもピンクでもない、ページュ。スードン指先で、暖炉の前でチェス！ ホワイトデニムにページュのセーターで砂浜を車で暴走デート！ お相手はスティープ・マックイーン！ ボロ、オープンカー、自家用飛行機、ホテルの朝食、オシャレすぎる大人の世界を脳裏に焼き付け、主題歌をエレクトーンで弾いてはうっとりしていた小学生の私。以来、憧れ続けてます。

服をめぐる

編集後記

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第4号
2016年7月25日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
電話：075-321-9221

ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎

写真：成田舞、福嶋英城

表紙写真：シャルル・マルタン（絵）、エリック・サティ（音楽）

『Sports & Divertissements（スポーツと気晴らし）』（1914年）より
「ヨット遊び」（部分） 京都服飾文化研究財団所蔵

KCIは衣装だけでなく、貴重な書籍や雑誌類も多数収蔵しています。表紙の絵は楽譜集『Sports & Divertissements（スポーツと気晴らし）』（1914年・900部限定）のイラスト「ヨット遊び」の一部です。ほかに「海水浴」や「ゴルフ」「テニス」など、全20テーマにエリック・サティが音楽をつけ、シャルル・マルタンがそれぞれイラストを描きました。スポーツが人々の余暇として広がり始めた時代の雰囲気や、軽やかに描いたお洒落で愛らしい作品です。

